

17

服装のディテールと フォーマル性との関係

Relationship between Formality and Details of the Dress

ファッション造形学科・助教
Department of Fashion Design・Assistant Professor

山縣 亮介 Ryosuke YAMAGATA

ファッション造形学科・助手
Department of Fashion Design・Research Associate

鷺津 かの子 Kanoko WASHIZU

ファッション造形学科・教授
Department of Fashion Design・Professor

石原 久代 Hisayo ISHIHARA

はじめに

服装は、基本的には時間、場所、用途により分類される。しかし、現在では生活様式の多様化により境界が曖昧になっているため、従来のような家庭、会社、学校、スポーツ、買い物、旅行、訪問、夜のパーティーなどといった区分が成立しなくなった。[1]

フォーマルウェアは、現代社会の中で生活していく上で、その社会的側面から欠かせないものである。しかし、フォーマルシーンも時代とともに多種多様な広がりを見せ、近年、特に従来の形式にとらわれず略式化されてきたため、フォーマルウェアは、タウンウェアと一部分が重なり合い、このことがフォーマルウェアの着装場面を広げたと同時にフォーマルウェアのカジュアル化の流れを強めたといえる。

また、日本人の和洋折衷の生活様式にもフォーマルシーンを曖昧にした原因がある。従来、日本では被服は季節で着分けるものとされてきたため、和服は洋服と違い、時間帯で着分けする習慣がない。その行動様式が洋装に対して影響を及ぼしたと考えられる。

しかし、流行が反映されたとしても、フォーマルの根本的な精神や規則は不変であると考ええる。

1 フォーマルウェア

1.1 フォーマルウェアとは

フォーマルウェアとは、冠(成人)婚(婚礼)葬(葬儀)祭(年中行事)などの社会生活において威儀を正し、敬意を表する場面に着装する被服をいう。制服が定められている職種の場合は、礼服についても何らかの形で定められていることが多い。欧米では、昼と夜の礼服が区別され、さらに、各シーンを場所や目的、参列者によりフォーマル(正礼装)、セミフォーマル(準礼装)、インフォーマル(略礼装)に着装し分けなければならない。なお、民族衣装の正装は国を問わず、正礼装として認められる。[2][3]

1.2 日本におけるフォーマルウェアの変遷

洋装におけるブラックフォーマルは、1950年頃に男性用ダブルスーツが既製服化され、販売されたことから一般に普及していった。洋装のフォーマルウェアが浸透していった理由に、和装よりも着用後の手入れが簡便であり、購入価格が安価、着脱が容易で機能的、豊富なサイズ展開などが挙げられる。

女性のフォーマルウェアは、1959年のミッチーブーム後にカラーフォーマルに対するニーズの兆しが現れ、1960年代後半に夏のシーズンだけでなく、年間を通じて洋服が着装されるようになった。当初は好天時に和装、雨天時に洋装といった具合に、

天候により着装し分けられていた。

時代を経るにしたがい、フォーマルウェアは和装から洋装へと移行し、既製服メーカーが消費者の需要に対応し、ブラックフォーマルのマーケットを拡大していった。1970年代に入ると宣伝販促に力を入れ、各メーカーが消費者に洋装のブラックフォーマルへの訴求と必要性をアピールし、日本人の生活の中に不可欠な装いとして浸透させていった。

1980年代には、DCブランドやライセンスブランドが登場し、ブラックフォーマルの個性化が求められた。新しいブラックフォーマルの登場は、バブル景気との相乗効果により、買い換え需要を喚起し、これまでのメインターゲットであった中高年層から若年層にまで広がっていった。また、女性のライフスタイルから考案されたミディスカートとロングドレスが組み合わされた「プラスオン・フォーマルドレス」が話題となった。

1990年代は、アイテムに変化が起きた時代である。アンサンブルやスーツといったあらかじめ組み合わせられたものや、個人の感覚でコーディネート可能なアイテムが登場した。手持ちのワードローブに買い足し、汎用性を求めることにより価格帯を抑えられるため、単品コーディネートが支持された。しかし、ブラックフォーマルの単品コーディネートは、組み合わせた上下の色が同素材や同色でも反物の違いから全く同じ色に見えないため、正礼装として適さないという問題点が浮き彫りとなった。また、結婚式や披露宴などにおける参列者の服装が、フォーマル中心からダークスーツ、ワンピースにストールやボレロを合わせるようなセミフォーマルやインフォーマルに変化していった。

1998年には、女性ブラックフォーマル市場活性化のためにアパレル業界が連携し、ブラックフォーマルの重要性の訴求と情報交換を目的とした「ブラックフォーマル共同キャンペーン」がおこなわれた。これは、織研新聞社を中心に素材メーカーとフォーマルメーカー13社が結集したものである。

2000年代に入ると、ストレッチ、ニット、カットソー、カジュアル合繊素材といったブラックフォーマルにとって新しい試みの素材提案や、海外縫製による安価な商品提案がより一層強化された。アパレル業界が常に新しい提案をおこない、消費者の服装変化に対してイニシアティブを持つことが、新世紀を迎えるにあたり重要な課題であることを認識した。^{[2][3]}

1.3 西洋におけるフォーマルウェアの変遷

古代、中世時代はフォーマルウェアを明確に区別しておらず、17世紀のフランスにおいてその基礎ができたとされている。この時代の服装規定では、宮中服(ローブ・デコルテ、ローブ・モンタント)と略服(ネグリージェ)の2種類に分かれていた。宮中服とは特別なフォーマルウェアであり、略服とは宮中以外で着るフォーマルウェアから普段着までを指している。

ヨーロッパでは古来より、黒色は死の恐怖を表す色としての意識があり、古代ギリシャ時代には、葬式の参列者は黒を着ていたという文献がある。近世ヨーロッパにおいて、喪服に黒を着装した歴史上初めての人物はシャルル8世の王妃となったブルターニュのアンヌ王妃とされている。また、1499年にアンヌ王妃はルイ12世と再婚し、アンヌ王妃の葬儀の際にルイ12世は、それまでの伝統的な国王の喪の紫から黒色の喪服をまとったとされている。その後、黒の喪服は一般に普及し、第2次世界大戦頃まで着装されたが、今日ではダークな色物を着装する傾向が強まっている。現在では、カトリック信者や特別な上位者、上流階級に属する人達のみが黒色の喪服を着用している。

1789年のフランス革命によりルイ王朝時代の服装が姿を消し、それに代わる近代的な服装が登場した。1769年のイギリス産業革命以後は、それまでの絹に代わって大量の毛織物が生産されるようになり、そこから簡素な紳士服が誕生した。フォーマルウェアが明確に区別されるようになったのは、1815年頃からは、時間、場所、目的のいわゆるT.P.Oによって衣服を選択するようになった。1818年に男性の被服に黒色が確立されたとされている。この時代に婦人服の基本形であるイブニング、ディナー、アフタヌーン、ガウン、スーツも確立された。

当時、メンズファッションの分野では、主導権がイギリスにあり、イギリス社交界では時間と目的に合わせた正しい装いが定着すると、それが教養の物差しとなっていった。1870年以降、ドレスコードの決まりは英国紳士達によって植民地や外交訪問先へ持ち込まれ、世界各地に細部にわたる決まりが浸透していき、それらを順守することが紳士の基本となった。

19世紀末、パリには多くの高級仕立て店が乱立しており、「オートクチュール」の規格も曖昧であった。しかし、イギリス人デザイナーのチャールズ・フレデリック・ワースにより、これらの高級仕立て店は、シャンブル・サンディカ(パリ・オートクチュール組合)として組織化された。当時のオートクチュールのデザイナーは、上流階級や特権階級などを顧客に持ち、舞踏会、食事会、オペラや音楽鑑賞などのフォーマルシーンで着装され、大衆の憧れとなった。

20世紀初頭、男性の基本服は燕尾服(テールコート)、スモーキング、フロックコート、ガウン、スーツの5つのアイテムであり、これらを朝食、ディナー、夜会、紳士集会、舞踏会、教会、観劇など25種類以上の機会に着装し分けなければならなかった。

第1次世界大戦が開戦すると人々は合理性と機能性を求め、スカート丈は短くなり、シルエットは広がっていった。女性が社会に進出し、職場に定着しはじめ、婦人服は、紳士服から約100年遅れて本格的に合理的形態を持つ服装となった。

1920年代にはアメリカにおいて、映画衣装デザイナーの専門職が確立し、1930年代に入ると映画衣装が大衆の服装に多大な影響を持つようになった。

第2次世界大戦後は、クリスチャン・ディオールやイヴ・サンローラン、ピエール・カルダンなどが多くの流行を生み出し、1960年代後半はマリ・クワントのミニスカートが時代を先導した。1970年代はスカート丈が多様化し、その後、ビッグシルエットやエスニックといった要素がフォーマルウェアに取り入れられるようになった。^{[2][3]}

2 研究の目的

服装規範は、フォーマルウェアの変遷の中にもみられるように変容を繰り返しながら現在に至っているが、若年齢層と中高年齢層ではその価値観に相違があると考えられる。装い方ひとつで、他人に不快感を与えることも多々あり、特に、最近のフォーマルシーンでの若者の服装の乱れが指摘され、論議を呼んでいる。しかし、過去における西洋のフォーマルウェアのような整然としたアイテムやディテールの規定が現在示されないまま、概論的にフォーマル性が謳われている場合が多く、若年者にとっては、ドレスのどのようなデザインや色彩がフォーマル性の高いものなのか理解しにくいと考える。

これまでの研究^{[4]~[10]}においても、「フォーマルな-カジュアルな」というイメージ評価では検討されているものの、そのデザインやディテールを取り挙げ、その関係を扱った研究はほとんどみられない。

そこで、本研究では、若者を対象に服装の各ディテールのどのような要因がフォーマル性に関与するかについて検討するとともに、今後の被服教育において、物としての被服と行為としての服飾についての理解を促すことを目的とする。

3 方法

3.1 実験試料の作成

フォーマル性に関与するディテールの要因を検討するために、本実験では、襟、袖、スカート・シルエット、パンツ・シルエットの4アイテムのディテールを試料として官能検査を行った。

試料は、Illustratorで作成した服装ディテール36種とした。

襟の試料としては、図1に示したように、開きの形状の異なるネックラインから、ラウンド・ネック、Vネック、スクエア・ネック、ハイ・ネックの4種、襟として比較的多く着用され、その形状が被験者に理解できると考えられるものとして、スタンド・カラー、ボウ・カラー、レギュラー・カラー、ピーターパン・カラー、ショール・カラー、テーラード・カラーの6種、さらにフォーマルドレスのディテールとして用いられやすいストラップレス・ネック、キャミソール・ネックを加えた12種とした。

袖の試料は、図2に示したように、丈の短いものとして、被験者が夏季シーズンに着用機会の多い、ノー・スリーブ、フレンチ・スリーブ、ハーフ・スリーブ、パフ・スリーブの4種、丈の長いものとして、デザインの特徴が明確な、ラグラン・スリーブ、ドルマン・スリーブ、シャツ・スリーブ、ツーピース・スリーブの4種とした。

シルエットの試料は、図3のスカート、図4のパンツ共に、人間の体に沿った原型であるストレート・シルエットと、裾広がりや人体から離れたフレア・シルエットの対比的なフォルム2種、基本的なレングスの種類である、ミニ・レングス、ニー・レングス、ミモレ・レングス、マキシ・レングスの4種とした。

3.2 実験方法

実験は、色彩の影響を排除し、形のみについての判断を求めるのが目的であることから、A4の白紙に黒でプリントアウトした試料を提示し、服装のイメージ評価に適していると考えられる「強い-弱い」、「ヤングな-アダルトな」、「上品な-下品な」、「やわらかい-かたい」、「エレガント-スポーティ」、「好きな-嫌いな」、「派手な-地味な」、「都会的な-田舎的な」、「あたたかい-冷たい」、「フォーマルな-カジュアルな」の10形容詞対について、SD法による5段階評定の官能検査を行った。

実験は線画で提示することから、被験者は、ある程度服装の知識を持ち合わせている必要があると考え、名古屋学芸大学メディア造形学部ファッション造形学科学生148名とした。なお、実験実施時期は2012年9月であった。

得られた5段階評価の結果に5から1の点数を与えて数値化し、被験者全体の平均官能量を算出した。さらに、イメージプロフィールを作成し、因子分析、クラスター分析を用いて、ディテールのイメージを検討するとともに、フォーマル性を取り上げ、尺度構成を行うことにより、関与する要因を検討した。

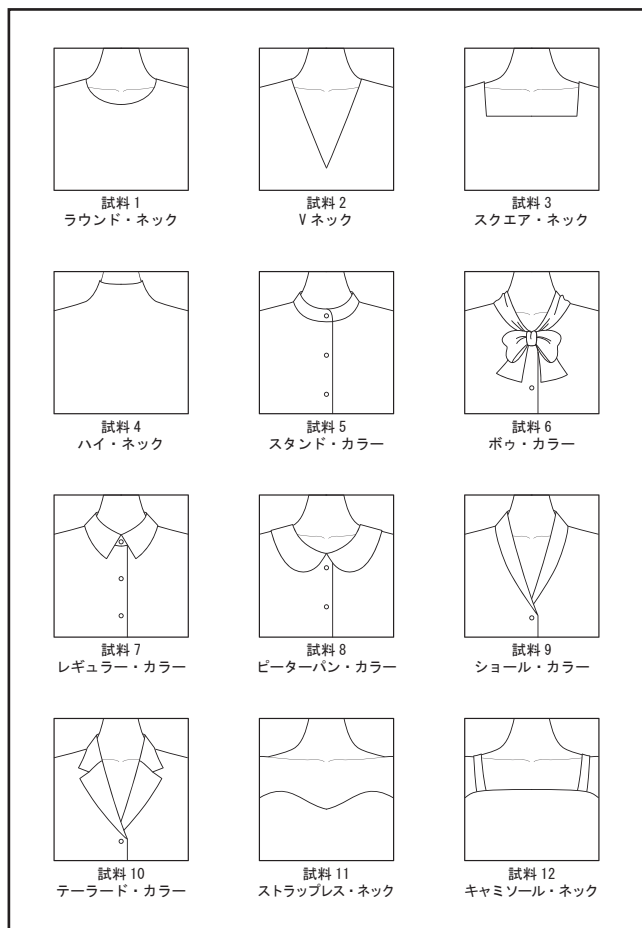


図1:アイテムA(襟)[11]

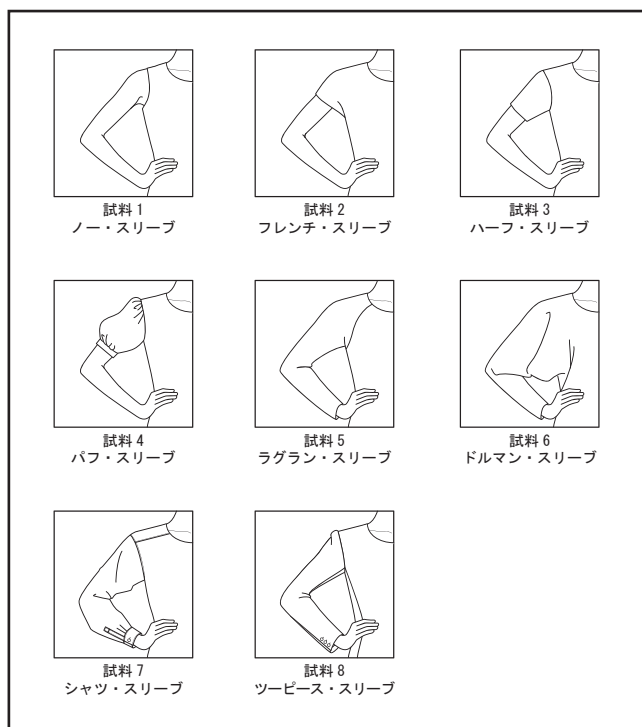


図2:アイテムB(袖)[11]

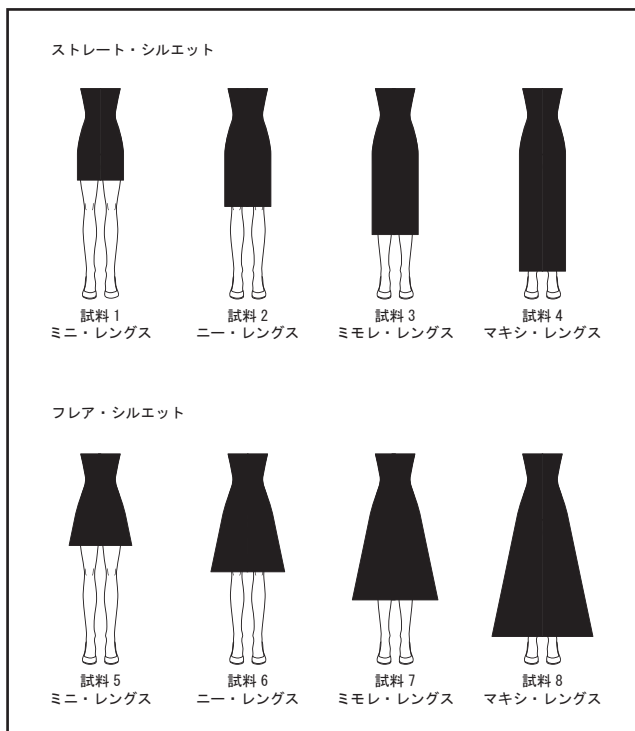


図3:アイテムC(スカート・シルエット)[11]

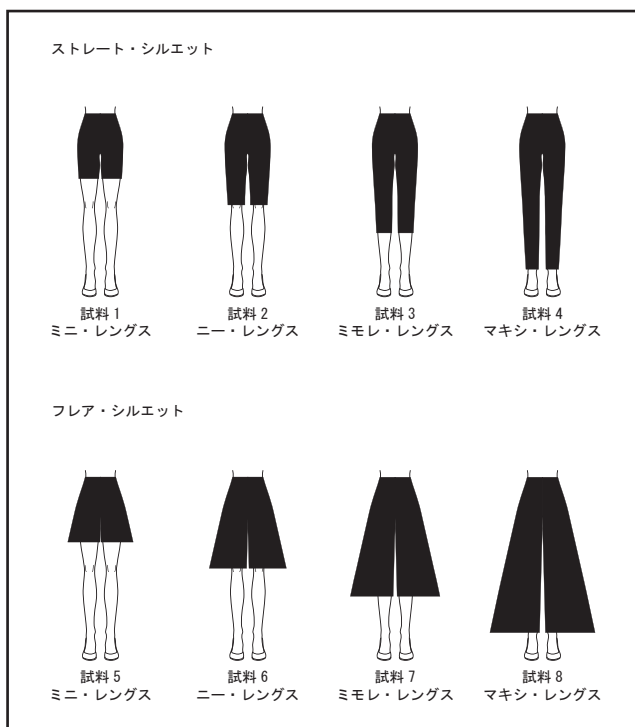


図4:アイテムD(パンツ・シルエット)[11]

4 結果および考察

4.1 官能検査結果

SD法による5段階評定の平均官能量の結果を図5に示した。10形容詞対すべてのイメージプロフィールを1図におさめて提示すると複雑になりすぎることから、どのアイテムも2図に分けて示した。

4.1.1 襟の平均官能量

アイテムA(襟)の平均官能量を図5-1に示した。「強い-弱い」では、ラウンド・ネックやピーターパン・カラーなどの曲線的なデザインのもの弱いという評価であり、「やわらかい-かたい」の評価も同様に、丸みを帯びたものやボウ・カラーのようなフェミニンなデザインのものやわらかいという評価であった。「ヤングな-アダルトな」では、被験者が普段装着しているアイテムであるTシャツやキャミソールなどに多く用いられるディテールをヤングなものとして評価している。「エレガント-スポーティ」では、ドレスなどに見られるストラップレス・ネックやジャケットの襟に使用されることの多いテーラード・カラーやショール・カラーなどの評価が高かった。「派手な-地味な」では、ストラップレス・ネックやキャミソール・ネックなどの胸元の開き大きいデザインや、動きに富んだボウ・カラーが派手なという評価であった。

4.1.2 袖の平均官能量

図5-2のアイテムB(袖)では、「エレガント-スポーティ」、「派手な-地味な」、「都会的な-田舎的な」、「フォーマルな-カジュアルな」、「好きな-嫌いな」は似通った傾向を示しており、それぞれ1%水準で有意な相関を得ている。従って、フォーマルな袖のデザインはエレガントで、都会的で、好きであり、派手な印象と結びつきが強いといえる。これらの中で最もフォーマル性が高く評価された袖は、ツーピース・スリーブであり、次いでシャツ・スリーブ、パフ・スリーブが挙げられた。逆に、動的なデザインのハーフ・スリーブやラグラン・スリーブは、「カジュアルな」と評価され、フォーマル性は低かった。なお、襟に比べてデザインによるフォーマル性の差は大きく、その他、「エレガント-スポーティ」もイメージ差が大きかった。逆に、「あたたかい-冷たい」や「好きな-嫌いな」などのイメージは襟よりも差が小さいといえる。

4.1.3 スカートのシルエットの平均官能量

図5-3のアイテムC(スカート・シルエット)では、「ヤングな-アダルトな」、「派手な-地味な」において、ストレート・シルエット、フレア・シルエット共にミニ・レングスが際立って高い値を示した。また、「派手な-地味な」、「ヤングな-アダルトな」は似た値を示し、これらと「エレガント-スポーティ」、「フォーマルな-カジュアルな」とは相反する値を示したことから、スカート・シルエットでは、

地味でアダルトなイメージとフォーマルなイメージが連動していると考えられる。

4.1.4 パンツ・シルエットの平均官能量

図5-4のアイテムD(パンツ・シルエット)についてもスカート・シルエットと同様に「ヤングな-アダルトな」で、ストレート・シルエット、フレア・シルエット共にミニ・レングスで特に高い値を示した。また、「派手な-地味な」、「ヤングな-アダルトな」の値が似通っている点はスカート・シルエットと共通した傾向である。これらの値と「エレガント-スポーティ」、「フォーマルな-カジュアルな」は相反する値を示したこともスカート・シルエットと共通していたが、パンツ・シルエットの評価はスカート・シルエットに比べて低い値を示した。

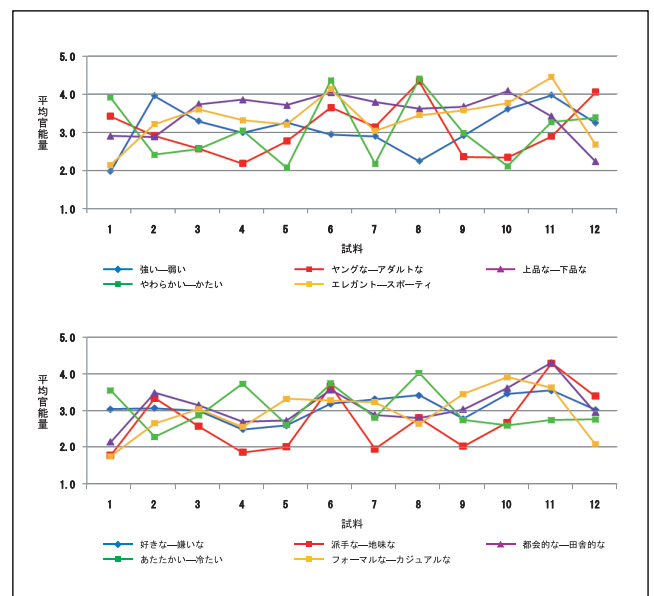


図5-1: アイテムA(襟)

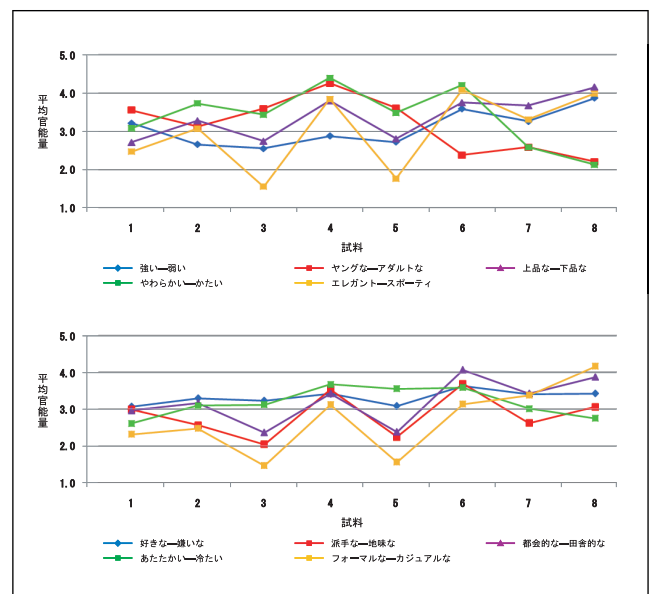


図5-2: アイテムB(袖)

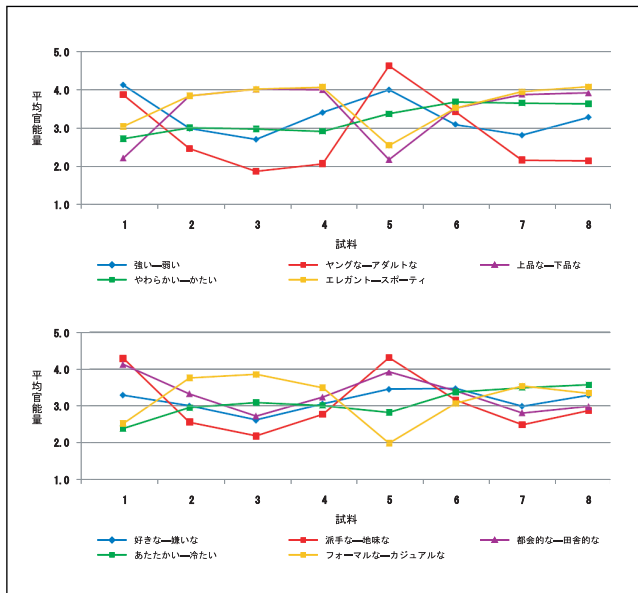


図5-3: アイテムC(スカート・シルエット)

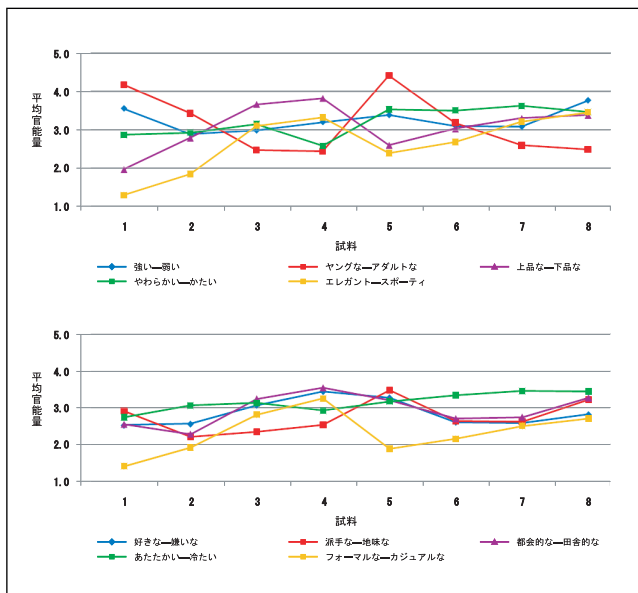


図5-4: アイテムB(パンツ・シルエット)

4.2 クラスタ分析結果

SD法による5段階評定の結果を数値化し、ウォード法(Ward's method)によるクラスタ分析を行い、アイテム別にデザインの分類を行った結果をデンドログラムにして図6～図9に示した。

4.2.1 襟のクラスタ分析結果

図6のアイテムA(襟)では、デンドログラムからA～Cの3クラスターに分類した。

Aクラスターには最も多い6試料が出現した。その内容はショール・カラー、テーラード・カラー、レギュラー・カラー、スタンド・カラーなどのメンズライクな試料であった。その特徴を検討するために、各イメージについてクラスター内平均を求め、比較すると、

「ヤングな-アダルトな」が全試料平均が3.04であるのに対し、2.56と低く、「やさしい-かたい」も全試料平均が3.05であるのに対し2.49、「派手な-地味な」が全試料平均が2.70であるのに対し2.1と、「アダルトな」、「かたい」、「地味な」に特徴をもつクラスターであるといえる。

Bクラスターはストラップレス・ネック、キャミソール・ネックなど開きの大きな試料で形成された。

Cクラスターに出現した3試料は、ボウ・カラーやピーターパン・カラー、ラウンド・ネックなどの丸みのある曲線的な形状のデザインが出現している。

4.2.2 袖のクラスタ分析結果

図7のアイテムB(袖)では、デンドログラムからAとBの2クラスターに分類した。

Aクラスターには、ラグラン・スリーブやノー・スリーブ、フレンチ・スリーブなどの活動的でシンプルな形状のデザインがまとまって出現した。

また、Bクラスターに出現したのはドルマン・スリーブ、パフ・スリーブ、シャツ・スリーブ、ツーピース・スリーブなどであり、Aクラスターと比較して複雑な形状のデザインが多かった。さらに、長袖と半袖のデザインが混在していることから、袖丈だけではなくデザインによってイメージが分かると考えられる。

4.2.3 スカート・シルエットのクラスタ分析結果

図8のアイテムC(スカート・シルエット)では、デンドログラムからAとBの2クラスターに分類した。

Aクラスターに出現した2試料は、どちらもミニ・レングスの試料であり、Bクラスターにはそれ以外のレングス6試料が出現した。これらのクラスタ分類には、シルエットに関係なくレングスによってイメージが大きく影響しているといえる。

4.2.4 パンツ・シルエットのクラスタ分析結果

図9のアイテムD(パンツ・シルエット)では、デンドログラムからAとBの2クラスターに分類した。

Aクラスターは、ミニ・レングスに加えてニー・レングス(ストレート・シルエット)を含む3種がグループ化され、Bクラスターは、それ以外の丈の長い試料がグループ化された。これらの分類は、スカート・シルエットと同様に、レングスによってイメージが分かっていることが判明した。

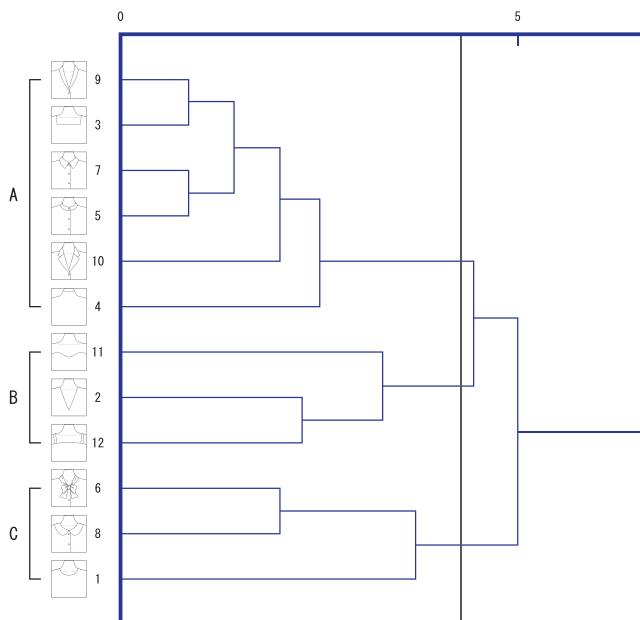


図6: クラスタ分析結果(アイテムA-襟)

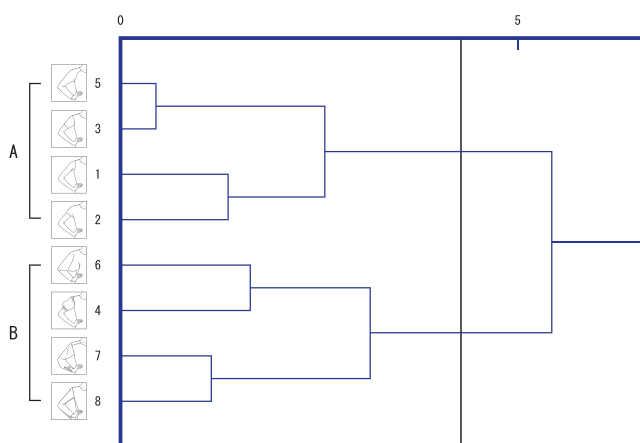


図7: クラスタ分析結果(アイテムB-袖)

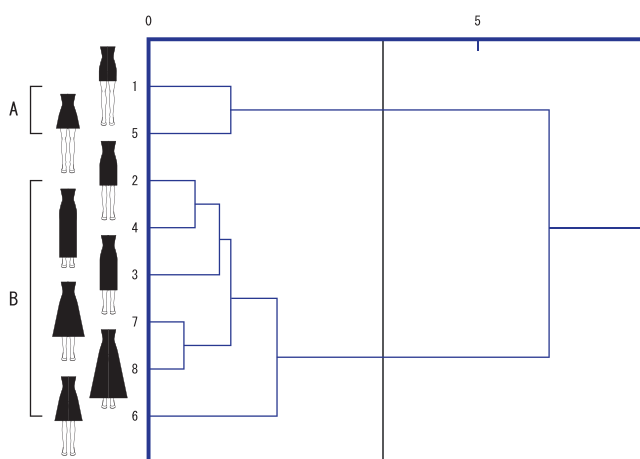


図8: クラスタ分析結果(アイテムC-スカート・シルエット)

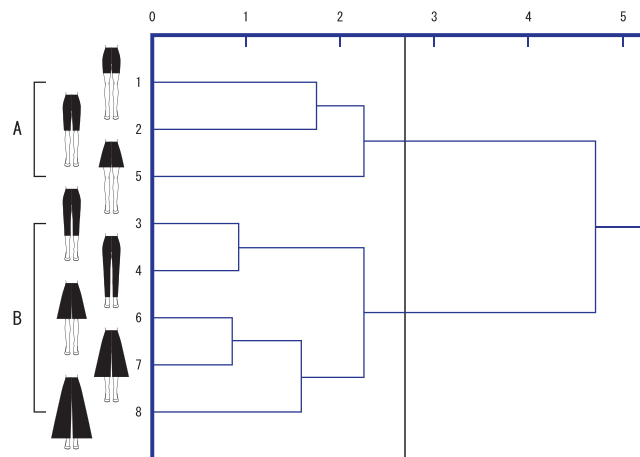


図9: クラスタ分析結果(アイテムD-パンツ・シルエット)

4.3 因子分析結果

アイテム別にどのような因子がイメージに影響しているかを検討するために、10形容詞対の平均官能量をもとに因子分析(主成分分析法)を行い、バリマックス回転後の因子負荷量を表1～表4に示した。また、それぞれの因子に関与する物理的要因を検討するために因子得点を算出し、その散布図を図10～図13に示した。

4.3.1 襟の因子分析結果

アイテムA(襟)の因子分析結果では、固有値1.0以上で第3因子まで抽出され、その累積寄与率は89.3%であった。第1因子で抽出された形容詞対は、「派手な - 地味な」が0.967、「都会的な - 田舎的な」が0.859、「好きな - 嫌いな」が0.744と高い負荷量を示しており、これらは評価性の因子をもつイメージと考えられる。第2因子は、「あたたかい - 冷たい」、「やわらかい - かたい」、「強い - 弱い」、「ヤングな - アダルトな」が高い負荷量を示し、力量性の因子と考えられる。なお、「強い - 弱い」はマイナスの負荷量を示していることから、「あたたかい」、「やわらかい」、「ヤングな」とは「弱い」が同調するといえる。第3因子は、「上品な - 下品な」、「フォーマルな - カジュアルな」、「エレガント - スポーティ」といった形容詞対が高い負荷量を示しており、本研究ではフォーマル性を主軸に置いていることからフォーマル性の因子と命名した。

これら各因子に関与する要因を検討するために、アイテムAの因子得点の散布図を図10に示した。第1因子軸のプラスに高い値を示したのはストラップレス・ネック、ボウ・カラー、Vネック、キャミソール・ネックなど比較的ネック回りの明きの大きな試料が多く出現し、逆にマイナスでは、ハイ・ネック、ラウンド・ネック、スタンド・カラーなどネックの詰まった試料が高い得点を示した。

また、第2因子軸のプラスには、ピーターバン・カラー、ボウ・カラー、ラウンド・ネックなど丸みのある曲線的な形状の試料が高い得点を示し、マイナスにはVネック、テーラード・カラー、ショール・カラーなど直線的にV形に明いている試料が高い得点を示して

いることから、明きのシャープさに関する軸と考えられる。

第3因子軸では、プラスにはテーラード・カラー、ボウ・カラー、シヨール・カラーなど複雑な形状の試料が布置し、マイナスには、キャミソール・ネック、ラウンド・ネック、Vネックなど単純な形状の試料が布置しており、シルエットの複雑性が関与していると考えられる。

表1: 因子分析結果(アイテムA-襟)

形容詞対	成分			共通性
	1	2	3	
派手な-地味な	.967	-.023	-.111	.948
都会的な-田舎的な	.859	-.347	.349	.980
好きな-嫌いな	.744	.184	.038	.588
あたたかい-冷たい	-.154	.941	.124	.925
やわらかい-かたい	.261	.894	-.188	.903
強い-弱い	.531	-.796	.131	.932
ヤングな-アダルトな	.336	.650	-.550	.837
上品な-下品な	-.111	.107	.970	.965
フォーマルな-カジュアルな	.334	-.379	.808	.909
エレガント-スポーティ	.641	-.076	.724	.941
寄与率	32.5	30.6	26.2	
累積寄与率	32.5	63.0	89.3	

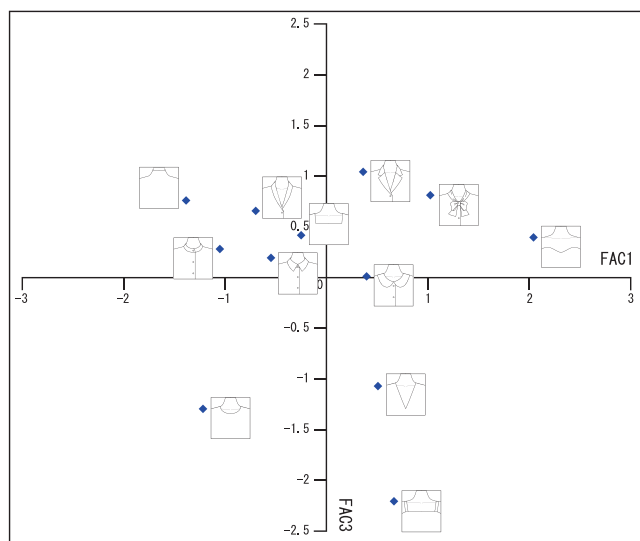
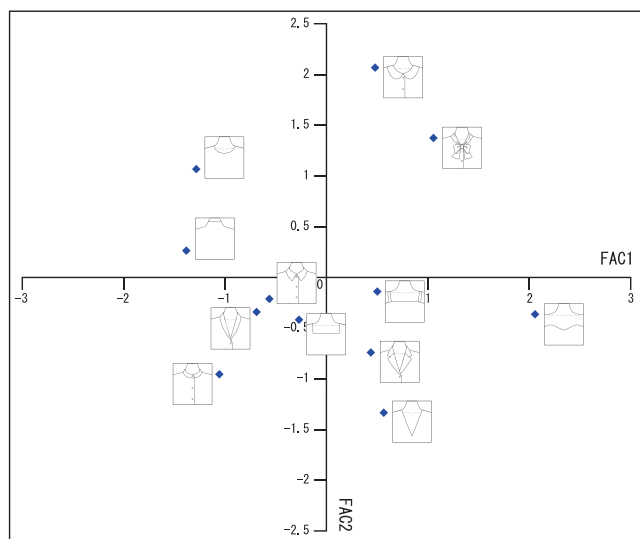


図10: 因子得点プロット(アイテムA-袖)

4.3.2 袖の因子分析結果

アイテムB(袖)の因子分析結果を表2に示したが、固有値1.0以上で2因子が抽出され、その累積寄与率は86.8%であった。

まず、第1因子で高い負荷量を示した形容詞対は、「都会的な-田舎的な」、「エレガント-スポーティ」、「上品な-下品な」、「フォーマルな-カジュアルな」、「好きな-嫌いな」、「派手な-地味な」、「強い-弱い」の7形容詞対であった。本研究ではフォーマル性の因子と命名するが、襟において第1因子で出現した評価性の因子の形容詞対とともに出現しており、評価性の高い袖がフォーマル性も高いと考えられる。また、第2因子では、「やわらかい-かたい」、「あたたかい-冷たい」、「ヤングな-アダルトな」の3因子が抽出され、「やわらかい」、「あたたかい」、「ヤングな」が同調し、いわゆる力量性、活動性に分類されるイメージが第1因子と第2因子で分裂して出現していることから、別の要因と推測され、かわいらしさの因子と考えた。また、「ヤングな-アダルトな」については、第1因子においても-0.590と比較的高い負荷量を示していることから、フォーマル性の因子にも関与するといえる。

なお、共通性の数値は、すべての形容詞対で0.70以上を得ており、この2因子でこれら袖のイメージは、ほぼ集約できると考える。

また、これらの因子に関与する要因を検討するために図11に因子得点の散布図を示した。

まず、横軸の第1因子軸のプラスで高い得点を示したのは、ドルマン・スリーブ、ツーピース・スリーブ、パフ・スリーブなど長袖や半袖の複雑な形状の試料であるのに対し、マイナスでは-half・スリーブ、ラグラン・スリーブ、ノー・スリーブなど単純な形状の試料が高い得点を示した。これらの布置の状況から形状の複雑性が関与するものと考えられる。

第2因子軸において、プラスで高い得点を示したのは、パフ・スリーブ、ドルマン・スリーブなど装飾的な形状の試料であるのに対し、マイナスでは、ツーピース・スリーブ、シャツ・スリーブなど機能的な形状の試料が布置している。

表2: 因子分析結果(アイテムB-袖)

形容詞対	成分		共通性
	1	2	
都会的な-田舎的な	.985	-.088	.979
エレガント-スポーティ	.979	.035	.960
上品な-下品な	.932	-.072	.874
フォーマルな-カジュアルな	.908	-.323	.928
好きな-嫌いな	.900	.179	.843
派手な-地味な	.836	.292	.784
強い-弱い	.784	-.494	.859
やわらかい-かたい	.009	.968	.937
あたたかい-冷たい	.134	.886	.804
ヤングな-アダルトな	-.590	.600	.709
寄与率	61.1	25.6	
累積寄与率	61.1	86.8	

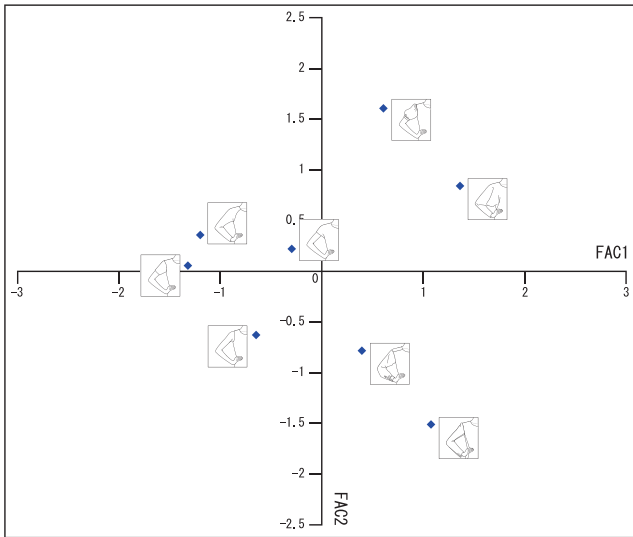


図11: 因子得点プロット(アイテムB・袖)

4.3.3 スカート・シルエットの因子分析結果

アイテムC(スカート・シルエット)の因子分析結果を表3に示した。固有値1.0以上で第2因子まで抽出され、その累積寄与率は94.2%と非常に高い値が得られた。

抽出された因子は、第1因子、第2因子ともアイテムBの袖とほぼ似た結果となった。しかし、「ヤングな - アダルトな」は、アイテムBの袖においては、第2因子のかわいらしさの因子に集約されながら、フォーマル性の因子にもやや高い負荷量を示していたが、ここでは第1因子に抽出された。その理由として、アイテムBの袖に比べてスカート・シルエットは、丈とボリューム感のみで形状が構成されているため、かわいらしいという要因が得られにくいことからフォーマル性の因子にシフトしたものと考えられる。したがって、第2因子には、「やわらかい - かたい」、「あたたかい - 冷たい」のみが抽出されたことから、因子名にあたってはあたたかさの因子とした。

また、第1因子のフォーマル性の因子において、表2のアイテムBの袖においては「フォーマルな」は、「都会的な」、「エレガントな」、「上品な」、「好きな」、「派手な」、「強い」と同調しているが、スカート・シルエットでは、「地味な」、「エレガントな」、「上品な」、「田舎的な」、「弱い」、「嫌いな」と同調し、「派手な - 地味な」、「都会的な - 田舎的な」、「強い - 弱い」、「好きな - 嫌いな」で内在する因子は同じであるにもかかわらず、評価は逆転するという結果であった。

さらに、その因子得点プロットを示した図12を見ると、第1因子のフォーマル性の因子において、プラスにスカート丈の短い試料が布置し、マイナスにスカート丈の長い試料が布置していることから、スカート丈が関与していると考えられる。また、第2因子のあたたかさの因子には、プラス方向にフレア・シルエットのデザイン、マイナス方向にストレート・シルエットのデザインが布置し、シルエットのボリューム感が影響していると考えられる。

表3: 因子分析結果(アイテムC-スカート・シルエット)

形容詞対	成分		共通性
	1	2	
フォーマルな—カジュアルな	-.982	.023	.965
派手な—地味な	.975	-.187	.986
ヤングな—アダルトな	.969	-.067	.944
エレガント—スポーティ	-.937	.172	.907
上品な—下品な	-.933	.291	.954
都会的な—田舎的な	.896	-.376	.945
強い—弱い	.875	-.336	.878
好きな—嫌いな	.842	.395	.865
やわらかい—かたい	.052	.990	.982
あたたかい—冷たい	-.496	.863	.992
寄与率	71.3	22.9	
累積寄与率	71.3	94.2	

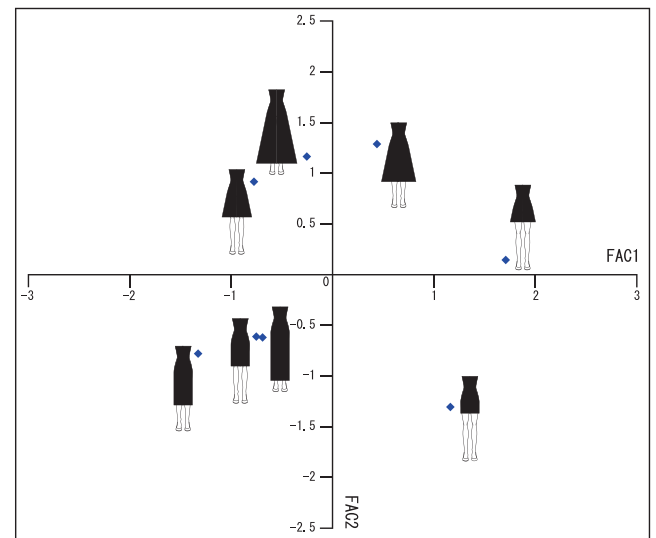


図12: 因子得点プロット(アイテムC-スカート・シルエット)

4.3.4 パンツ・シルエットの因子分析結果

アイテムD(パンツ・シルエット)の因子分析結果を表4に示したが、固有値1.0以上で第3因子まで抽出され、その累積寄与率は92.8%と非常に高い値が得られた。

第1因子では、「フォーマルな - カジュアルな」、「上品な - 下品な」、「エレガント - スポーティ」、「都会的な - 田舎的な」、「ヤングな - アダルトな」、「好きな - 嫌いな」が高い負荷量を示し、フォーマル性の因子といえ、ここでは評価性の因子と合わせて抽出された。

第2因子は、「派手な - 地味な」、「強い - 弱い」が高い負荷量を示し、力量性の因子をもつ形容詞対であると考えられる。この第2因子は、同じボトムスのシルエットでもあるスカート・シルエットでは、第1因子のフォーマル性の因子と合わせて出現しており、スカート・シルエットに比べ、複雑な因子構造となった。さらに、スカート・シルエットにおいては、「フォーマルな」は、「田舎的な」、「嫌いな」と同調していたが、パンツでは、「フォーマルな」は、「都会的な」、「好きな」と同調しており、同一因子で評価されているも

の、スカートとパンツではイメージが逆転していることは興味深い結果である。因子構造としては、ボトムスであるスカートよりも袖と類似した結果であった。

第3因子は、「あたたかい - 冷たい」、「やわらかい - かたい」といったあたたかさの因子が出現した。

図13の因子得点の散布図を見ると、第1因子のフォーマル性の軸では、プラスにロング丈のシルエットが布置し、マイナス方向にショート丈のデザインの試料が布置していることから、レングスが影響していると考えられる。第2因子軸には、プラスにはフレアミニ・レングス、フレアマキシ・レングスなど極端なシルエットが位置し、逆にマイナスには、ニー・レングスやミモレ・レングスなど平凡なシルエットが布置していることから、個性的であるかどうかの軸と考えられる。

また、第3因子軸には、プラス方向にフレア・シルエットのデザインの試料が布置し、マイナス方向にタイトなシルエットが布置していることから、シルエットのボリューム感が影響しているといえる。

表4: 因子分析結果(アイテムD-パンツ・シルエット)

形容詞対	成分			共通性
	1	2	3	
フォーマルな—カジュアルな	.984	-.147	-.001	.990
上品な—下品な	.954	-.272	.113	.997
エレガント—スポーティ	.920	.028	.384	.995
都会的な—田舎的な	.839	.497	-.167	.979
ヤングな—アダルトな	-.812	.417	-.217	.880
好きな—嫌いな	.681	.406	-.448	.829
派手な—地味な	-.121	.966	.218	.995
強い—弱い	-.063	.841	.054	.714
あたたかい—冷たい	.310	.004	.939	.979
やわらかい—かたい	-.063	.251	.924	.920
寄与率	46.7	23.8	22.2	
累積寄与率	46.7	70.6	92.8	

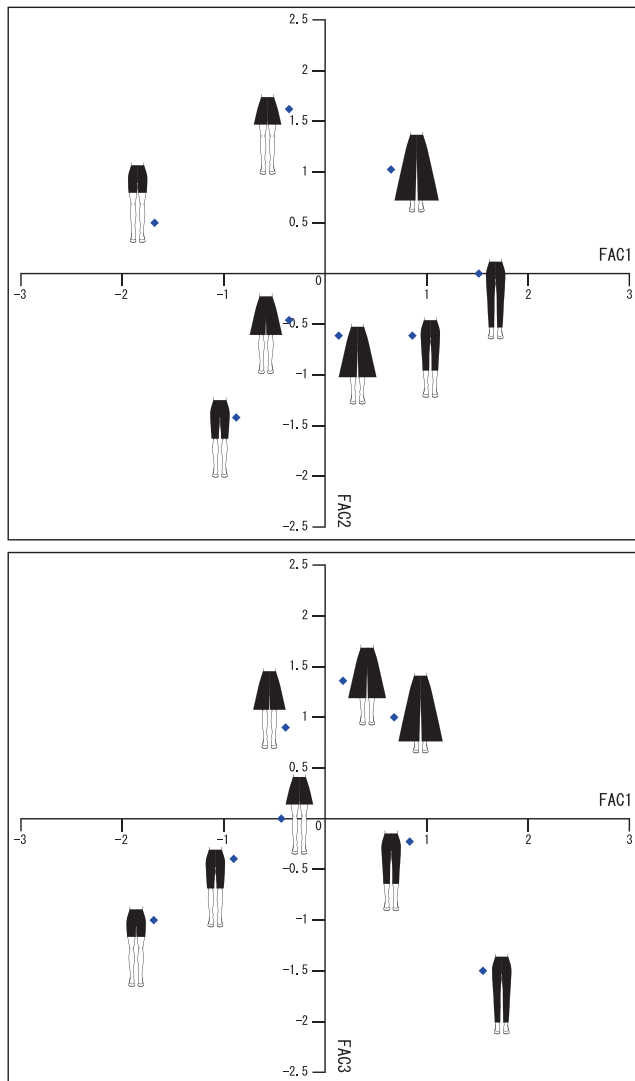


図13: 因子得点プロット(アイテムD-パンツ・シルエット)

4.4 フォーマル性の尺度構成

SD法による平均官能量から、全ディテールの「フォーマルな - カジュアルな」のみの結果を尺度化したものを図14に示した。

今回使用した試料の中で最もフォーマル度が高いと評価されたのはアイテムB(袖)の「ツープース・スリーブ」であり、際立った結果であった。アイテムA(襟)では、「テーラード・カラー」や「ストラップレス・ネック」など、フォーマルなシーンで着装されるアイテムに用いるディテールの評価が高かった。また、胸元の開きが大きなデザインであっても、ストラップレスではフォーマル性が高いという評価に対し、「キャミソール・ネック」のストラップ有りではフォーマル性が低いという評価であった。これら襟や袖のディテールとフォーマル性尺度との関係から、学生のフォーマルに関する意識が通常のパーティーなどのシーンで着装するドレスのイメージもあるものの、それ以上にテーラードジャケットなどを着用する堅いシーンの方がより強くフォーマルの概念としての意識にあることが推察される。

また、ボトムスのシルエットにおいては、その量感よりもレングスが強く影響しており、短いものはフォーマル度が低いという評価であったが、スカートではフレア・シルエットのミニ・レングスの評価が最も低く、パンツではストレート・シルエットのミニ・レングスの評価が最も低かった。

また、アイテム別では、スカートの方がパンツよりもフォーマル度が高いと意識していることが判明した。

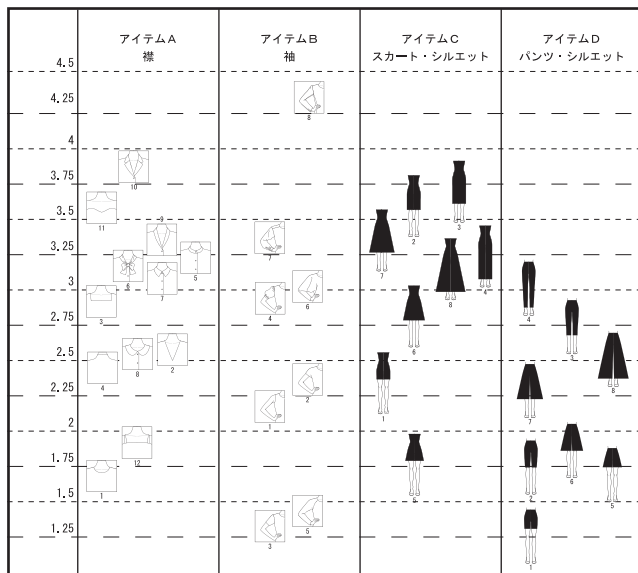


図14: 尺度構成

5 要約

服装のディテールとフォーマル性との関係を検討するために、襟、袖、スカート・シルエット、パンツ・シルエットの4ディテールを用いて官能検査を行った結果、次のようなことが明らかとなった。

官能検査の結果、襟に対する評価では、丸みのある曲線的なデザインのものに対して「弱い」、「やわらかい」、「ヤングな」という評価であり、逆に直線的でV形明きのデザインに対して「強い」、「かたい」、「アダルトな」という評価であった。

袖は「エレガント - スポーティ」、「派手な - 地味な」、「都会的な - 田舎的な」、「フォーマルな - カジュアルな」の評価は似通った値を示したのに対して、スカート・シルエット、パンツ・シルエットでは「エレガント - スポーティ」、「フォーマルな - カジュアルな」と「派手な - 地味な」、「都会的な - 田舎的な」の評価は相反する値を示した。袖では派手なデザインはフォーマル性が高いと評価されているが、スカート・シルエット、パンツ・シルエットでは派手なデザインはフォーマル性が低いと評価された。

因子分析の結果、固有値1.0以上で、襟では評価性、力量性、フォーマル性の3因子、袖ではフォーマル性、かわいらしさの2因子、スカート・シルエットではフォーマル性、あたたかさの2因子、パンツ・シルエットではフォーマル性、力量性、あたたかさの3因子が抽出された。これらの内在因子は、襟やパンツ・シルエットのように形状が多少複雑なアイテムは、フォーマル性因子と評価性因子が分離した構造を示し3因子で出現しているが、単純な形状のアイテムである袖とスカート・シルエットは、フォーマル性因子と評価性因子が合体した構造で出現している。なお、「やわらかい - かたい」、「あたたかい - 冷たい」は、どのアイテムにおいても別の因子として出現しており、フォーマル性と次元が異なる因子といえる。

今回使用した全試料の中で最もフォーマル性が高いと評価されたのはツープース・スリーブであり、逆に最もフォーマル性が低いと評価されたのはストレートパンツのミニ・レングスであった。襟や袖のディテールとフォーマル性の評価から、学生のフォーマル性に関する意識は、パーティーなどで着装するドレスのイメージはあるもののテーラードジャケットなどを着用する堅いシーンの方がより強いことが推察される。また、ボトムスのシルエットにおいては、その量感よりもレングスが強く影響しており、短いものはフォーマル度が低いという評価であったが、スカートではフレア・シルエットが、パンツではストレート・シルエットの評価が低かった。

なお、アイテム別では、スカートの方がパンツよりもフォーマル度が高いと意識していることが判明した。

参考文献

- [1] 崎田喜美枝「ファッション ディレクション」同朋舎出版, P79, 1992
- [2] 田中千代「新・田中千代服飾事典」同文書院, 1991
- [3] 清家壽子「フォーマルウェア講座」織研新聞社, P114～P120, P132～P139, P141～P151, 2002
- [4] 能登原英代／山口晴久「デザインのふさわしさの認知特性に関する基礎研究」岡山大学教育実践総合センター紀要, 第3巻P87～P96, 2003
- [5] 藤原康晴／藤田公子／山本昌子「女子学生および中年女性の服装に関する規範意識と独自性欲求との関連性」日本家政学会誌, Vol.40, No.2 P137～P143, 1989
- [6] 黒田悦子／松浦禮子「女子短大生のフォーマルに対する意識と着装に関する調査」愛知女子短期大学研究紀要第36号, P101～P114, 2001
- [7] 内田直子「衣生活行動の合理化とフォーマルウェア—レンタル行動の視点から—」学習院女子短期大学研究紀要第32号, P1～P18, 1994
- [8] 西藤栄子／中川早苗「中高年女性のおしゃれ意識と規範意識」日本家政学会誌, Vol55, No.9, P743～P751, 2004
- [9] 藤原康晴／杉田洋子／福井典代「服装規範意識測定における個人差と個人内のあいまいさの検討」日本家政学会誌, Vol.50, No.4, P371～P375, 1999
- [10] 住友淑恵「場違いな服装で恥をかかないために必読!! 最低限知っておきたい『フォーマルウェア』の基本マナー」月刊OLマニュアル22 (255), P76～P82, 2010
- [11] 高村是州「Ladie's Fashion Items スタイリングブック」グラフィック社, P49, P52～P53, P72～P74, P81, 1993